The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	借用からみた言語と文化の関係 : コエグ語（ナイル・サハラ言語群）の中のカラ語（アフロ・アジア言語群）の要素
Author(s)	稗田, 乃
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 1991, 2, p. 92-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71070
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

借用からみた言語と文化の関係

―コエグ語（ナイル・サハラ言語群）の中のカラ語（アフロ・アジア言語群）の要素―

稗田　乃

１。序

本報告の目的は、コエグ語の中にみられるカラ語からの借用語から、言語と文化のあいだの関係を探ることである。隣りあうもののあいだで、行動のパターン、技術的な手段、宗教的儀式、個人的行為の流儀など、事物や習慣は、伝播する。事物や慣習とともに、それの名前であることば形式も、移行する。ことば形式の移行するやり方は、事物や慣習が移行するやり方に無関係ではありえないだろう。事物や慣習が移行する社会間のあり方に関係してくる。しかし、たとえもし、そうだとしても、人間の行動パターンは、社会間の関係で説明できるほど、簡単なものではないだろう。ただ、コエグ語社会とカラ語社会は、他の世界から全く孤立しているわけではないが、かなり閉ざされた地域に存在する。ゆえに、コエグ語のカラ語からの借用のやり方を観察することは、他の要因をかなりな程度、排除し、社会間の関係から言語と文化のあいだの関係を探る手がかりとなるだろう。はじめに文化を、行動のパターン、技術的な手段、宗教的儀式、個人的行為の流儀など、と定義した。いいかえれば、文化とは、生活様式と，社会関係から由来する内面の価値観である。ここでは、生活様式をおおざっぱに簡略化して、生業とそれにまつわる慣習とみる。

コエグ語は、カラ語から、語彙の面でも、文法の面でも、かなり多くのものを借用している。ここでは、語彙の面からコエグ語のカラ語からの借用のやり方を観察する。特に生業にまつわる語彙を中心にみてみる。

１。１。コエグ社会とカラ社会

コエグ語の話し手とカラ語の話し手は、エチオピア西南部、オモ川下流にすむ。コエグ語の話し手は、約３００人、カラ語の話し手は、約２０００人である。

コエグ語の話し手は、農耕と、狩猟と採集を生業にしている。農耕にかんしては、オモ川の自然堤防と氾濫原にモロコシを中心に栽培している。狩猟は、オモ川の河辺林において簡単な罠と、銃で狩猟をおこなう。ただし、銃弾が不足しているため、獲物の数は、か

なり少量にかぎられている。かれらのタンパク質摂取の源の中心は、オモ川での漁労による魚である。家畜は、ほとんど持たない。かれらのエネルギー摂取の源として、農耕からの産物は、重要な位置を占めているいるが、コエグ語の話し手の文化の中心的特徴は、狩猟と漁労にある。たとえば、コエグ語の話し手は、名ずけ親の制度を持っている。男子の新生児が生まれたとき、男性の名ずけ親は、新生児の手に小枝で作った弓と矢を握らせ、その子に名前をあたえる。「名ずける」というコエグ語の表現は、文字どうりに訳せば、「弓を与える」になる。また、子供が成長し、自分の手で初めて大型獣を獲たとき、父親の前でうたう歌がある。その父親は、近隣の人々にハチミツから作った酒を、このときふるまわなければならない。漁労についても、魚をうたった歌が数多く存在する。ことばの面では、野生動物や魚の細かく分類した名称を、コエグ語はもつ。「野牛」を意味する一般名称のほかに、雄か雌か、大きいか小さいか、年をとっているか若いか、等を組み合わせて区別する９個の「野牛」という名詞がある（たとえば、大きな雄の野牛：ｄｉｍａｋ、若い雌の野牛：ｋａｕｒａ、老いた雄の野牛：ｂｕｓｈ，若い雄の野牛：ｇｉｄｅ，小さな雄の野牛：ｃ’ｅｎｃｅｌａ，成熟した雄の野牛：ｋｏｂｏｒ，老いた雌の野牛：ｇｏｇｕｒａ，小さな雌の野牛：ｍｏｇｏｓｈ，成熟した雌の野牛：ｃａｒｋｅｉｌｂａｎ）。魚についても、同様のことがある。魚には、季節によって体色を変える魚がいるが、体色を変えた魚をその魚の「兄弟（ｃ’ｅｎｅ）」と、コエグ語の話し手は、認識し、それぞれに名前を与える（たとえば、ドワダ（ｄｏｗａｄａ）という魚の兄弟は、バルジュグマ（ｂａｒｕｊｕｇｕｍａ）。また、日本の出世魚のように、成長するにしたがって名前を変える魚がいる。鯰の一種，クワダ（ｋｕｗａｄａ）という魚は、大きくなるにしたがって、ウオルチャ（ｗｏｒｃａ）、カンカチャ（ｋａｎｋａｃａ），プルンド（ｐｕｒｕｎｄｏ）と、名前を変える。このように、コエグ社会の文化の中心的特徴は、狩猟・採集である。

カラ語の話し手は、かれらの生活を「右手に家畜、左手にモロコシ」と表現する （松田、１９８８）[1]。右は、かれらの観念では左よりも価値の高いものであるから、かれらは 、農耕よりも牧畜に、より高い価値を置いていることがわかる。カラ語の話し手は、ウシ、ヤギ、ヒツジを所有する。ヤギとヒツジは、オモ川から１０～１５ｋｍほどはなれた山麓で放牧する。ウシは、近隣の部族であるハマル（Ｈａｍａｒ）に預けられる。このように、ウシの牧畜に依存し、ウシにまつわる慣習を文化の中心的特徴とするハマルにくらべて、カラ語の話し手は、かれらの生活を、ウシにさほど依存していない。むしろかれらの生活

は、農耕に依存している。かれらは、オモ川の自然堤防と氾濫原においてモロコシを中心に栽培をし、自給に十分な農作物をえている。しかも、余剰のモロコシと交換して、ハマルから家畜を手にいれる。カラ語の話し手のウシにまつわる慣習は、ハマルのそれとほとんど同じであり、カラ語の話し手の本来のものとみなす必要はない。むしろ、カラ語の話し手は、このオモ川下流域に新しい農耕の方法を持ち込んだ人々と考えられる。たとえば、コエグ語の中に多くの農耕にまつわる慣習の語彙が、カラ語から借用されている（耕作地：ｈａａｍｕ［Ｋａ　ｈａａｍｉ］、耕作地の境界：ｍａａｒｉ［Ｋａ　ｍａａｒｏ］，草を刈る：ａｃ’ａａｒｉｙａａ［Ｋａ　ｃ’ａａｒａ］，鍬：ｇａｉｔａ［Ｋａ　ｇａｉｔａ］，収穫する：ａｐａｔｉｉｙａａ［Ｋａ　ｐａｔａ］，手でモロコシを脱穀する：ａｓｈａｋａｍｉｙａａ［Ｋａ　ｓｈａａｋｕｍａ］，粉にひく：ａ’ｄｉｉ’ｄｉｙａａ［Ｋａ　ｄｉｉｓｕｍｏ］）。このように、カラ社会の文化の中心的特徴は、農耕である。

１。２。コエグとカラの社会関係、歴史

コエグ語の話し手とカラ語の話し手が接触したのは、たかだか二、三世代前であったとかんがえられる。このことは、カラ語の話し手の伝承と近隣の部族であるオモ・ムルレ（Ｏｍｏ－Ｍｕｒｌｅ）が伝える伝承によって推測できる（ＨＩＥＤＡ、１９９１ａ）。コエグ語の話し手は、カラ語の話し手が移住してくる前からオモ川下流域に住んでいた。カラ語の話し手は、オモ川下流域に移住してくるや、本来のコエグの土地を占拠し、農耕をはじめた。コエグ語の話し手は、逆に、カラ語の話し手から土地を借りて農耕を行なうこととなった。カラ語の話し手の伝える伝承によれば、コエグの話し手は、この時、畑はつくっておらず、カラ語の話し手がかれらに農耕を教えたのだという（松田、１９９１）。一方、コエグの話し手は、かれらの独自の農耕の起源についての伝承をもっており、かれらの農耕の起源については、カラの伝承とは一致しない。この不一致に関しては、ことばの面でも、コエグ語の農耕に関する語彙の中に、カラ語起源以外の語彙が見つかることから、コエグの話し手は、カラ語の話し手から新しい農耕の技術を導入する以前に、既になんらかの農耕の技術をもっていたことがわかる（たとえば、モロコシ：ｒｕｕｂｕ［Ｋａｉｓｈｉｎｇ’］、耕す：ａｋｏｈｉｙａａ［Ｋａ　ｐａｋ’ｉｄｉｉｎａ］）。カラの移住の際、エチオピア西南部にひろく存在した習慣、一種の盟友関係の名のもとに、農地の借り手のコエグと貸し手のカラは、関係をもつこととなった。この関係は、コエグ語でベルモ（ｂｅｌｍｏ）、カラ語でベル（ｂｅｌ）と呼ばれる。この関係は、世帯ごとに

結ばれ、関係を結ぶ者のあいだで物品の交換、贈与が行なわれる。コエグからはモロコシとハチミツが、カラからはヤギ、ヒツジ、弾丸などがもたらされる。また、コエグの話し手は、ベルモであるカラ語の話し手の畑を耕作したり、鳥追いの番をすることもある。この関係は、コエグ語の話し手はそうとは認めてはいないが、どちらかといえば、コエグのカラへの従属的な関係である。実際、すべての耕作地はカラの所有であり、コエグ語の話し手には、ただ耕作権のみがある。

また、この両者のあいだには、通婚関係がないばかりでなく、一種の差別的な関係がある。カラ語の話し手は、コエグ語の話し手とともに、同じ容器から飲食をすることはない。

ことばの面では、うえで述べた関係と並行した関係が観察できる。カラ語が上位言語で、コエグ語は下位言語である。上位言語であるカラ語から、コエグ語へともっぱら、ことばは借用される。また、コエグの話し手のほとんどは、男女の差なく、成長すればカラ語を習得し、二言語使用者になるが、その逆に、カラ語の話し手は、わずかな例外をのぞいて、コエグ語を習得することはない。借用の方向と、二言語使用への習得の方向から、カラ語が上位言語で、コエグ語が下位言語であることは疑いない。次章では、コエグ語の借用のやり方から、実際に、言語と文化のあいだの関係を探る前に、語彙の面と文法の面におけるコエグ語の中のカラ語からの借用について、簡単にみておこう。

2。コエグ語の中のカラ語の要素

前章で、借用の方向は、カラ語からコエグ語であるとのべた。借用の方向を決定するには、二つの手順が必要であると考えられる。一つは、言語の構造上からの証明であり、一つは、語彙の分布からの類推である。言語の構造上からの証明をおこなうには、カラ語とコエグ語の構造は、いまだに十分に研究されていない。とくに、カラ語に関しての研究が十分ではない。それゆえ、語彙の分布を観察することによって、借用の方向を決定することにする。

コエグ語は、ナイル・サハラ言語群の中のスルマ系言語群に属する。カラ語は、アフロ・アジア言語群の中のオモ系言語群に属する。この両者の言語は、系統的に全く違っているし、構造上も全く違っている。カラ語の記述がないので、カラ語と同じオモ系言語群に属し、しかもカラ語と一つの方言グループをつくっていると考えられている極めてよく似た言語であるハマル語を用いて、構造上の違いをみてみよう[2]。

コエグ語は、主語、動詞、目的語の順の語順をもつのにたいして、ハマル語（カラ語）

は、基本的には、主語、目的語、動詞という語順を持つ。

Ko　ote　indaa　aan

　　bee　bites　me

　　(A bee bites me.)

Ha　edi　waki　k'anidi

　　man　cow　drove

　　(A man drove cattle.)

コエグ語は、前置詞的言語であるのにたいして、ハマル語（カラ語）は、後置詞的言語である。

Ko　tok　ka koegu

　　language of Koegu

　　(The Koegu language.)

Ka　waxa-sa imba

　　bull-of father

　　(A father's bull.)

このように、類型論的にコエグ語とカラ語は、全く構造上違っている。

次に、語彙の分布を手がかりにして、両者の借用の方向を探ってみよう。もし、コエグ語とカラ語が、類似した意味を持つ類似した形式を持ち、さらに、この形式が、ハマル語の形式と類似していれば、その形式は、カラ語とハマル語、ひいては、オモ系言語の本来の語とみなすことができ、そして、コエグ語は、カラ語から借用した結果、類似した形式を持つことになったとみなすことができる。

	Ko	Ka	Ha
畑	haamu	haami	ami

コエグ語の話し手は、かれらがカラ語の話し手と持っているような緊密な関係を、ハマル語の話し手とは持ってはいないし、過去にそのような関係を持ったこともない。このことから、コエグ語からハマル語へ語が借用されたと考えることはできない。ゆえに、借用の方向は、カラ語からコエグ語とみなすことができる。いままでのところ、この逆の方向の借用、コエグ語からカラ語への借用は見つかっていない。これ以降は、ハマル語からの例証を引くことなく、コエグ語とカラ語が、互いに類似した意味を持つ類似した形式を持てば、それは、コエグ語がカラ語から借用した結果であると考えることにする。

２。１。コエグ語の中のカラ語からの借用

コエグ語のカラ語からの借用語には、語末の母音が異なっているかのようにみえるものがある。

	Ko	Ka
畑	haamu	haami

コエグ語では、語末の母音が／ｕ／であるのにたいして、カラ語は／ｉ／で語末が終わっている。この母音の音色の違いは、コエグ語がカラ語から借用を行なったときに音韻論的に生じたと、一概に決定することはできない。たとえば、カラ語の名詞は、語根と接尾辞からなり、範疇が異なるのにしたがって、語根に異なる接尾辞が接辞される。たとえば、ハマル語から例をあげる。

畑	小さい畑	大きい畑	全ての畑	様々な畑
ami	am*a*	ammo	amino	amma

コエグ語がどの範疇の形式を選んで、借用したかにしたがって、語末の母音は決定されたと考えられる。しかし、コエグ語がカラ語から借用するとき、これらの形式からどの範疇の形式を選んで借用したのか明らかではない。そこで、本報告書においては、コエグ語がカラ語から借用するとき、どの範疇の形式を選んで借用したかは、問題にしないことにする。

２。２。語彙の面でのコエグ語のカラ語からの借用

コエグ語が、カラ語から語彙を借用するとき、語彙全体をすっかり借用する場合と、部分を借用する場合がある。たとえば、手の指の名称をみてみよう。

	Ko	Ka
親指	duma	duma
小指	kambi	kambi
親指と小指以外の指	saita c'akal	gido saita

コエグ語のｓａｉｔａ　ｃ’ａｋａｌのｃ’ａｋａｌは、「真ん中の」を意味するコエグ語の語である。ｓａｉｔａは、カラ語の語をそのまま借用したのであるが、ｇｉｄｏは、コエグ語の語、ｃ’ａｋａｌに翻訳して借用をした。この場合、ｃ’ａｋａｌも翻訳借用の結果であるから、「親指と小指以外の指」も全体を借用したものと考えられる。

	Ko	Ka
火傷	reeba	reeba
ひどい火傷	ata reeba	ata reeba

この例では、複合語になろうとも、語彙全体をすっかり借用し、部分を翻訳借用をすることもない。では、部分的借用の例として、次の例をあげよう。

	Ko	Ka
手首	kanta	kanta
足首	kanta ka jap	gintii

カラ語は、「手首」と「足首」を全く異なる語で表現しているが、コエグ語は、カラ語から借用する際に、「足首」を「足」の「手首」と分節し、「手首」のみをカラ語からの借用語に入れ替えている。「手首」のみを部分的に借用している。また、この例とは少々異なるが、部分的な借用と考えられる例がある。

	Ko	Ka
指で刺を抜く	aashiyaa	gucidiina
別の刺で刺を抜く	aashiyaa waac'iwaac'i	waac'iwaac'aidiina

カラ語では、「指で刺を抜く」と「別の刺で刺を抜く」はともに一語で表現されているが、コエグ語では、「別の刺で刺を抜く」は、一般的な意味を持つ動詞に意味を限定する要素を付けて、二語で表現している。この意味を制限する要素をカラ語から借用している。これは、一種の部分的な借用とみることができよう。

コエグ語が、カラ語から借用を行なうとき、語の持つ意味領域を変えることがある。上の例で、ｋａｎｔａは、カラ語ではただ「手首」だけを意味するが、カラ語からコエグ語に借用されたとき、「手首」のみならず、「関節」をひろく意味するようになった。これは、一種の意味領域の拡大である。この逆に、語がカラ語からコエグ語へ借用されるとき、その意味領域を縮小することがある。

	Ko	Ka
花	ola	uushumi
稲科の花	aashimi	

カラ語のｕｕｓｈｕｍｉは、あらゆる種類の植物の花を意味しているが、これがコエグ語に借用されたとき、ただ稲科の植物の花のみを意味するようになった。これは、語が用いられる意味領域が制限されたことを示している。コエグ語は、もともと稲科の植物の花

を意味する語を持っていず、あいていた隙間をカラ語からの借用語で埋めたのか、それとも、もともとはコエグ語本来の稲科の植物の花を意味する語を持っていたにもかかわらず、その本来の語をカラ語の語と入れ替えたのかは、明らかではない。

しかし、コエグ語がカラ語から借用するとき、コエグ語の本来の構造にあわせて借用を行なったことが、はっきりと分かる例がある。

	Ko	Ka
妻の父	baaba	bais
妻の母	bais	bais

親族名称の構造において、カラ語は「妻の父」と「妻の母」を区別しないのにたいして、コエグ語は「妻の父」と「妻の母」を区別している。社会の構造上、カラの社会では「妻の父」と「妻の母」を区別しないのにたいして、コエグの社会では「妻の父」と「妻の母」の区別に意味があると考えられる。そして、理由はわからないが、コエグ語は、「妻の母」のみをカラ語からの借用語で置き換えている。

２。３。文法の面でのコエグ語のカラ語からの借用

コエグ語は、文法的な要素もカラ語から借用している。その一例として、使役動詞をつくる接尾辞、動名詞をつくる接尾辞、分詞をつくる接尾辞をあげる。

Ko	wa?ati	otaa	Ka	wa?ati	kats'idiina
	oil	melt		oil	melt
	(Oil melts.)			(Oil melts.)	
Ko	aot-ish-iyaa	wa?ati	Ka	inta	wa?ati	kats'i-si-diina
	I-melt	oil		I	oil	melt
	(I melt oil.)			(I melt oil.)	

コエグ語は、カラ語の使役動詞をつくる接尾辞、－ｓｉを借用した。これが単なる語彙の借用ではないことは、この接尾辞がコエグ語本来の動詞にも接辞されることから容易にわかる。この接尾辞がコエグ語本来の文法要素でないことは、コエグ語と同じスルマ系言語群に属するムルレ語（Ｍｕｒｌｅ）が，使役文を接辞を使った形態論的な使役文ではなく、統語論的な使役文をつくることから分かる[3]。

Mu awot 'dolec agero'

drink child medicine

(A child drinks medicine.)

Mu k-a'dute awot 'dolec agero'

I-make drink child medicine

(I make a child drink medicine.)

コエグ語は、動詞語幹に接尾辞、－ｉｎｔｏをつけて動名詞をつくる。この接尾辞は、カラ語から借用されたものである。

Ko aan ai hur ka asik-into　　Ka inta asik-into eedi na

I am man of working　　I working man am

(I am a worker.)　　(I am a worker.)

コエグ語は、動詞語幹に接尾辞、－ｉｎｔｅをつけて分詞をつくる。この接尾辞は、上記の動名詞をつくる接尾辞と同じものか、あるいは、異なるものか、明らかではない。

Ko gom-inte korung'

holding throat

（ｓｈｒｉｍｐ、食べると喉にひっかかるので）

動名詞、ａｓｉｋｉｎｔｏの場合は、ａｓｉｋｉｎｔｏそのものが、カラ語から借用された可能性を否定できない。しかし、ｇｏｍｉｎｔｅの場合は、「握る」という動詞、ｇｏｍ－ａａに、接尾辞、－ｉｎｔｅが接辞されて形成されていることと、この「握る」という動詞、ｇｏｍａａがコエグ語本来の動詞であることから、接尾辞、－ｉｎｔｅが、コエグ語の中で分詞をつくる文法的要素として働いていることは明らかである。

３。コエグ語のカラ語からの借用語からみた言語と文化の関係

コエグ語の語彙集（ＨＩＥＤＡ，１９９１ｂ）は、コエグ語の語彙を簡単な意味の連想から分類して編集している。それは、たとえば、身体に関係する語彙、植物に関係する語彙、動物に関係する語彙、食事に関係する語彙、衣服に関係する語彙、住居に関係する語彙、日常生活に関係する語彙、動作に関係する語彙、親族に関係する語彙、社会生活に関係する語彙、自然に関係する語彙など、１９の意味分野に分類されている。本報告においては、一章で述べたコエグ社会の文化の中心的特徴である狩猟・採集の、その語彙を中心に、言語と文化の関係を借用の面から探る。対照するために、身体に関係する語彙と、食

事に関係する語彙と、親族に関係する語彙と、住居に関係する語彙と、農耕に関係する語彙をとりあげる。

3。1。身体に関係する語彙

	Ko	Ka		Ko	Ka
肩	kapana	kapana			
肩甲骨	kaaro lapo	kaara lapo	骨	gici	lapo
はあはあ息をする	awogyaa	wooga	息をする	ahuagiyaa	uusica
息をはく	abuliyaa	bula	息をすう	awasiyaa	uusi arsa
におう	agaamiya	gama	わるいにおいがする	maajaa	c'oka
よいにおいがする	gaamaa shuka	ts'aalina gama			
ひどいけが	kora	kora	けが	gie	ajim
かさぶた	ganga	ganga	膿	mujugu	londet
きずあと	mada	mada			
睾丸に水がたまる	k'uiya	k'uiya	病気	demen	burki
病気					
癩癇	beelo	beelo			
手足が不自由になる	ac'uuradyaa	c'uuraidiina	びっこ	'dokocen	ahokolo
こする	aliibiiyaa	liiba			
指でおさえる	ahaamiyaa nap	nap			
薬	deesha	deesha			
医者	hur ka deesha	deesha eedi			

上の左のコエグ語がカラ語から借用を行なった語彙のグループを、右のコエグ語が借用を行なわなかった語彙とくらべると、借用を行なった語彙は、借用を行なわなかった語彙よりも、総じて特殊な、あるいは制限された意味を持っている。たとえば、「骨」そのものをさす名詞は、コエグ語本来の形式をコエグ語は保存しているが、「肩甲骨」になると、コエグ語はカラ語からの借用語を用いている。病気の個々の名前になると、コエグ語は、借用語を用いるが、「病気」そのものをさす名詞は、やはりコエグ語本来の形式を保存している。「わるいにおいがする」は、一見、「におう」よりも制限された意味を持つ語彙のように思われるが、実際は、「わるいにおいがする」ことのほうが、コエグ社会にとって重要な意味を持った語彙なのである。「わるいにおいがする」物をけっして食べないこ

とが、かれらの生存にきわめて重要であるばかりでなく、「わるいにおいがする」ことは、かれらの文化の中で特別な意味を持つ。たとえば、コエグ語の話し手は、人前で放屁をすることを極端にさける。人前での放屁は、かれらにとって超自然的な意味をともなった忌避すべき行為なのである。

３。２。衣服に関係する語彙

	Ko	Ka		Ko	Ka
衣服	apala	apala	着る	akomeniyaa	arsa
すすぐ	ashaamiyaa c'opc'op	c'upc'upaidiina			
はだかである	purdurko	puridunko			
糸	kere	kire			
縫う	agooziiyaa	gooza	穴をあける	ac'akiyaa	jagidiina
歯をみがく	ashekeiyaa	shikidiina	顔をあらう	auaniyaa	shaya
ビーズ	haraga	haraga			

コエグ語の話し手にとって、左のグループの語彙がさすのは、新しくかれらの文化の中に入ってきたものであり、右のグループの語彙は、かれらがもともと持っていた文化に属するものをさす。たとえば、「衣服」は、具体的には綿の布でできた体にまきつけるものをさしているが、コエグ社会の伝統的衣装ではない。かれらの伝統的衣装は、動物の皮からつくられた。「縫う」は、綿の布を糸で縫うことであり、したがって、新しくかれらの文化の中に入ってきたものである。一方、「穴をあける」は、動物の皮に穴をあけ、動物の皮からつくった皮ひもで縫うことであり、かれらの伝統的な衣装は、このようにつくられていた。

３。３。食事に関係する語彙

	Ko	Ka		Ko	Ka
粉	'dil	'duulo	たべもの	mish	its'aro
かたがゆ	da?ano	da?ano			
まぜる	awargeiyaa	warga	料理する	aakiyaa	baka
かまど石	baaki	abaaka	壺	juu	daa
ヒョウタン	gusha	gusi	半割りヒョウタン	k'oshe	sharka
すする	asuutiiyaa	suuta	たべる	aamiyaa	its'a

			容器の底にこびりついたたべものをこすげる	aunkokeyaa	guka
ふたをする	ashupiyaa	shupi	ふた	kadi	shupi
すっぱい	balk'aka	balk'aka	あまい	cuana	daats'a

「たべもの」や「料理する」や「たべる」は、一般的な意味領域を持った語彙であり、やはり、このような一般的な意味領域を持った語彙は、借用語と置き換えられにくい傾向がある。「容器の底にこびりついたたべものをこすげる」は、コエグ社会にとって意味のある語彙である。食料がさほど豊かではない社会で、コエグ語の話し手は、まず、成人男性から食事をとる。容器の底に残った食料を、女性と子供達が食べる。これは、社会でいちばん生産能力が高い人間から、食事をとることによって、社会全体の生産力をおとさないことを示している。このように特殊な意味を持った語彙であれ、その社会において固有の価値を持つ語彙は、借用語と入れ替えられにくい傾向を持つ。

３。４。住居に関係する語彙

	Ko	Ka		Ko	Ka
床	shen	shen	家	to?o	oono
柱	tupa	tupa	家の壁の芯の木	shani	sako
女の腰掛け	mora	mora	男の腰掛け	karam	borkoto
ごみを帚であつめる	apuusiiyaa	puusha	掃く	ahigyaa	saa

「家」や「掃く」は、一般的な意味領域を持った語彙であり、やはり、借用語とは置き換えられにくい。それにひきかえ、家の構造の部分は、制限された意味領域を持つ語彙であり、借用語と入れ替えられやすい傾向がある。「男の腰掛け」は、その形が重要であるばかりでなく、それの持運び方、それへの腰掛け方にも様式があり、コエグ社会の文化の中で固有の価値をもつものである。一方、「女の腰掛け」は、とりわけて加工されない木の棒である。

３。５。親族に関係する語彙

	Ko	Ka		Ko	Ka
義理の父	baski	baski	父	shunne	amba
長男	toidi	tuidi	子供	hanta	naaso
結婚	gaido	gaido	結婚する	aiyanishiyaa	keemidiina
不妊の女	seeko	seeko	出産する	ajiisheniyaa	iikama

「父」や「子供」は、一般的な意味領域を持った語彙で、「義理の父」や「長男」は、制限された意味領域を持つ語彙である。「結婚」という名詞は、結婚にまつわる儀式などを含む語であるのにたいして、動詞、「結婚する」は、一般的な意味領域を持つ語といえる。「不妊の女」には、負の価値が付与されている。負の価値を持つ語彙も、借用されやすい傾向がある。

３。６。牧畜に関係する語彙

	Ko	Ka		Ko	Ka
未経産雌牛	k'atab	k'atab	牛	bii	wanga
小牛	ooto	ooto			
家畜の乳房	k'aaka	k'aaka	人間の乳房	ute	ami
新鮮な乳	shete dasi	raats'i desi	乳	shete	raats'i

「牛」は、一般的意味領域を持つのにたいして、「未経産雌牛」や「小牛」は、制限された意味領域を持つ。「家畜の乳房」や「新鮮な乳」は、牧畜を生業の一部としないコエグ語の話し手にとっては、身近ではない語彙になる。身近ではない語彙は、借用語で置き換えられる傾向がある。

３。７。農耕に関係する語彙

	Ko	Ka		Ko	Ka
モロコシの品種名	logomo	logomo	モロコシ	ruubu	ishin
畑	haamu	haami			
畑の境界	maari	maaro			
除草する	ahaarimiyaa	harmo	耕す	akohiyaa	pak'idiina
根からひっこぬく	abuuc'iyaa	buuc'a			
豆をさやからとる	amaishiiyaa	maisho			
鍬	gaita	gaita			
斧	c'uk	shuko			

モロコシの品種名の例は、一例だけをあげておいたが、他にも多くのカラ語からコエグ語へ借用されたモロコシの品種名がある。モロコシそのものの一般名は、コエグ語は、もともとの語を保持している。１章で述べたが、コエグ語の話し手は、カラ語の話し手から新しい農耕の技術を導入する以前に、農耕を行なっていた。「モロコシ」の一般名称や「耕す」という語は、カラ語と接触する以前のなごりである。やはり、ここでも「モロコシ」

や「耕す」といった一般的意味領域を持つ語彙ほど、借用語と入れ替わりにくい。

３。８。狩猟・採集に関係する語彙

	Ko	Ka		Ko	Ka
狩猟する	aadinsiiyaa	adima	足跡を追う	aiyamiyaa	c'aga
狩人	hur ka adima	adima eedi	忍びよる	ajigiyaa	zaapa
			待ちぶせる	augusheyaa	bats'imo
			おいかける	arishiyaa	goba

３。８。の狩猟・採集に関係する語彙における借用のやり方は、３。１。から３。７。までの借用のやり方と全く逆の現象を示している。つまり、「狩猟する」や「狩人」といった一般的な意味領域を持つ語彙が、借用語と入れ替えられ、「足跡を追う」、「忍びよる」など制限された意味領域を持つ語彙が、借用語と入れ替わらず、保存されている。３。１。から３。７。までは、一般的な意味領域を持つ語彙が、借用語と入れ替わりにくい傾向を強く示していた。１章で述べたが、コエグ社会の文化の中心的特徴は、狩猟・採集であった。このことから、その社会の文化の中心的特徴に関係する語彙は、一般的な意味領域を持つ語彙が借用語と入れ替わり、制限された意味領域を持つ語彙が借用語と入れ替わりにくい傾向を持つ。

４。まとめ

借用語と入れ替わりやすい語彙とそうでない語彙をまとめると、次のようになる。社会の文化の中心的特徴に関係しない語彙では、制限された意味領域を持つ語彙が、借用語と入れ替えられやすく、一般的な意味領域を持つ語彙が、借用語と入れ替えられにくい。また、制限された意味領域を持つ語彙であっても、その社会で固有の価値を持つ語彙は、借用語と入れ替えられにくい。社会の文化の中心的特徴に関係する語彙では、逆に、制限された意味領域を持つ語彙が、借用語と入れ替えられにくく、一般的な意味領域を持つ語彙が、借用語と入れ替えられやすい。このように、ことば形式の移行に、文化のありかたが影響を与えている。

注

コエグ語とカラ語の調査は、文部省科学研究費補助金（国際学術研究）により、平成２年１月から３月にかけて、エチオピア西南部クチュル村及びジンカの町において、それぞれ行なった。

１）　カラ語の話し手の文化の記述は、その多くは、松田（１９８８）と（１９９１）、並びに松田からの個人的な情報提供によっている。

２）　カラ語については、Ｌｙｄａｌｌ（１９７６）にもとずく。

３）　ムルレ語については、Ｔｕｃｋｅｒ（１９５２）にもとずく。

参考文献

Hieda, Osamu. 1990. KOEGU,a preliminary report, *Journal of Swahili and African Studies*,Vol.1. pp.97-108

1991a. (to appear) OMO-MURLE,a preliminary report, *Journal of Swahili and African Studies*, Vol.2.

1991b. KOEGU VOCABULARY, with a reference to Kara, *African Study Monogaraphs, Supplementary Issue no.14.* Kyoto, The center for African Area Studies.

Lydall, Jean. 1976. Hamer, in Lionel M. Bender (ed.), *The Non-Semitic Languages of Ethiopia.* East Lansing, Michigan State University

松田　凡　　１９８８。「オモ川下流低地の河岸堤防農耕－エチオピア西南部カロの集約的農法－」、アフリカ研究３２号、４５頁～６７頁。

１９９１。「民族の「併合」と「同化」－エチオピア西南部ＫＯＥＧ　Ｕをめぐる民族間関係－」、アフリカ研究３８号、１７頁～３２頁。

Tucker, Archbald Norman. 1952. 'Notes on Murle (Beir)', *Afrika und Übersee*, 36, pp.99-114.